

田所哲太郎先生の業績と学恩

学長 梶 浦 善 次

田所先生は、満90才のお誕生日を迎えるとともに学長職をご辞任なされ、私がお後を継ぐこととなった。先に先生から学長代理を指名され、さらに先生のお後を引き継ぐこととなった。このことに関して、私は宿命的なものを見、因縁の不思議さといったものを感じるのである。

私が、先生を知り直接に交渉をもつようになったのは、昭和24年6月先生が北海道学芸大学学長となられた時であった。先生が北海道大学をご退職後のことであり、先生の学者・教育経営者としての後半に入ってからのことであった。私は、当時附属の札幌小・中学校の校長を兼任しており、附属学校を大学の実験学校としてどのように運営するかということで、他の人たちよりは多く接触があった。しかも先生とは必ずしも意見が一致しなかったもので、随分勝手なことを申し上げたように思う。それがふたたび本学において、先生の下で短大運営に当たることになり、また「開発功労賞受賞に輝く人びと」に、先生のご希望で先生のお思い出を書くことにもなった。宿縁を思うというゆえんである。

先生は大学を卒業されるや直ちに母校北海道大学の教壇に立ち、わが国における生化学の領域で次ぎ次ぎと開拓者の業績をあげられ、専門の酵素および蛋白質に関する百篇に余る論文と数十冊の著書となった。また北海道学芸大学、帯広畜産大学さらに本学の学長を歴任され新しい大学の創造にまた拡充に比類ない業績を示めされたのである。再三にわたる在外研究や数多くの受賞などは、先生が学者・教育者として最高の輝かしい道を歩まれたことを物語っている。

とくに本学の創設に当って、先生が初代の学長となり、指導に当たられたことは、本学に盤石の重みを加えたものであり、その意義はまことに大きかったのである。先生は早く米寿を祝い、すでに卒寿を迎えられるというのに、学者としての在り方を身をもって示めされ、研究紀要には毎号欠かさずご専門の生化学の論文を発表されたのであった。絶えず新しい分野を開拓されようという研究の情熱、さらにそれを実際生活に応用して社会に寄与しようとする実践的な意欲は、先生をして、心身ともに永遠の青年たらしめている。先生の存在はそれのことだけでわれわれに対する光明であるということができる。

先生が人間の限界に挑戦され、ご希望の百才まで否それ以上に長くご活躍されることを学恩に対する感謝とともにお折りするのである。